

ね，“べったり”でないやさしさと，上手な甘え方。結局やさしさって芝居だと思うね。気を使うほど相手の人格を大切にしているってこと，言えると思う。

青春とは僕らが人生のすべてを可能性として意識し，また実際にあらゆる可能性をはらんで生きる時代である。——中村光夫

思いを，心流れるままにしたためるうちに，冬休みも終わり，僕は再び湖北の雪景色を見た。定義されるのはいやだ。個性を一緒くたにされたくない。そこには人格のひとかけられないじゃないか。僕は僕で僕以外の何者でもないのに。愛する自分を見出だせないなんて寂しすぎる。寂しいよォー。

今だと思う。自分を形成するのは今だと思わないか。僕はもう埋まっていたくないよ。それに心おもむくままコトを進めうるのは今ぐらいさ。去年の夏，僕は自分をふり返って「青春の半熟」って感じてい

断

「年をとる。それはおのが青春を，歳月の中で組織することだ。」と誰かが言った。これは途方もなく豊かな青春を持った者の言葉だろう。少くとも僕にとっては，年をとるとは，青春の夢を具体化しようとすることによって欠落していく純粋さを，きたえ上げた想像力によって補償していくことでなければならないように思われる。

“人間の空間知覚の心理学的な側面を科学的に研究する”ということに関わって，はや5年が過ぎたが，やっていることが，結局は，虚構を作る作業ではないかと思ひ，少し寂しくなることがある。窮極の真理は，無限遠にあって，言葉や説明によっては，それをかい間見ることさえできないだろうから。

近頃，僕が美しいと思って感動するのは，ごく些細なことに対してだ。陽光がキラキラしてまばゆい川面，そよ風にサラサラ音を立てる木の葉……。そして，それもほんの瞬間的なものだ。実は美しい

だ。でも現在は「燃焼」しよう，というところ。本当に，死んじゃったら何の価値もないんだけど，自分を大事にするがゆえに，一度ぐらい「生きてッ」って気のする時機を残しておきたいんだ。単調な人生の寂しさを考えると，寂しがりやの僕はたまらないんだもの。

お願い：当方，個人主義に基づき皆様の人格を尊重いたしますので，寂しがりや同士，愛とやさしさでご協力願います。当方の活動に支障のある悪意あるお邪魔は御免蒙ります。

付言一—アタも生命を燃やしてみない？生命の燃焼，それを青春と呼んでもいいだろう，なんちゃってキザノ

付言2—何をやる気なのかって？何をどうするかは各自の決めることさ。共通してればその線内で一緒にやればいいし。人生は創作ゲームだよ（これもキザ）。

想

海老原 直 邦

と思っているのではなく，キラキラする光や，サラサラという音におのが寂しさを投影し，共振することできなくさめを得ようとしているのかもしれない。美はもっと生き生きと創造的で，先導的でなければならない！



いわゆる科学的な研究というものに関係していると，知らず知らず，発想が，知性の論理に支配されていくようだ。しかし，発想とは，本来，むしろ感性的なものであり，感性の論理によってこそ精神の機能は高められるのではないだろうか……などと考えている。

（人間行動研究 助手）

愛 と 不 信

情報行動科学コース2年 白石健二

愛の認識は先験的なものであると同時に、多く経験的なものであるがゆえに、愛した経験、愛された経験の無い者にとっては、愛は信じがたいものである。もしある人が利己的な愛、奪う愛のみを経験してきたとするならば、その人にとって愛はそのようなものであり、犠牲の愛、無償の愛を見ると、懐疑する。

現代のような愛の不毛の時代においてはなおさらそうであり愛を不信し、愛をおとしめ、愛を蹂躪する言葉は世に満ち満ちている。そして今日も、愛の経験をしたことのない者たちが真実の愛の所有者を取り囲み、「偽善者め」「甘い甘い」「早く本性をあらわせよ」と嘲笑し、罵倒しているのである。

思い返してみれば、人類の不幸は、そのような真実の愛を発見できないことにあった。どれほど多くの真剣な人々が、愛に失望し、人間に絶望し、未来と歴史を閉ざしてきたことであろう。

二千年前のユダヤの人々も人間が信じられなかった。愛の不毛の中にあった。そういう時、イエスが、犠牲の愛を叫び、愛し合うことを説いても、彼らはそれを信じられなかった。

人々は十字架を負ってゴルゴダへ向うイエスの後をゾロゾロとついていった。あざ笑い、石を投げながら、彼らは、一体何時このイエスが、苦難に耐えきれずに、人々に向かって呪いの言葉を吐きかけて死ぬかを期待して待っていたのである。そしてその時こそ、「ほれ、みろ、あの男も又、普通の人間であったのだ。絶対的な愛などありはしない。神の愛など、ありはしない。」

しかし一方で、彼らの心には消し得ない不安が宿っていた。もしかして、この人が……という思いは、彼らの笑いを時におその表情に変えた。彼らの本心は期待していたのだった。そのような愛を見出して人間を信じ、自分自身を信じたいと願っていたの

だった。しかし他方では、もしイエスがそのような存在であった場合、自分の今のあり方が否定されることを恐れており、その矛盾した思いは、彼らにとって不安を振り切るために、彼らは、十字架上のイエスに対して、なお一層激しくあざ笑い、罵倒のこぶしを振りあげたのである。

しかし、そのように罵倒する彼らの耳に聞こえてきた声は、こうであった。「父よ、彼らをおゆるし下さい。彼らは何をしているのか、わからずにいるのです。」沈黙した人々の耳に、その声は、かつてこの地上で聞いたことのない言葉として耳に響き、その心の一番深いところに浸みこんだのである。

人々はゴルゴダの丘をとぼとぼと下りながら、たった今、目の前にした一つの死、その人が死の間際にさえも示した愛を心に刻みつけていた。イエスの生涯の一つ一つ思い出されてきていた。そうだった、あの人は、愛の存在を教え、示し、生活し、証明して下された。間違いのない、あの人は、私たちを愛して下されたのだ。……彼らは、自分たちの罪におそれおののきながら、一人一人、おのおのの家に帰っていったのである。

愛の冷えた現代、私たちも愛を信じない。そして、今も又、愛を十字架を課し、そのあとをゾロゾロとついて行って、愛を試みているのである。愛の意味は試みることにではなく、愛を働かせることにあるということを忘れた、その後に残るのは、ユダヤの人々と同じ悔恨の念ばかりである。

二千年前のゴルゴダの丘は、今の私たち一人一人のいる所であり、その物語は、人間の愛に対する姿勢のあやまちとおろかしさを示しているのである。

「薬は、本来、毒である。」

情 報 I.

マスコミの発達には各種の薬を世に広めるのに役立つ。テレビ・ラジオ・新聞・雑誌などで薬品の広告や宣伝を見たり聞いたりしないという日は、一日もない。これらの広告や宣伝は人々に薬の効果を頭から信じこませる結果となった。私達は少しでもからだの具合がおかしいとすぐ薬にたよってしまうという悪い癖がある。そして、多くの人々は薬の効力を少しも疑わない。しかし、今や薬に対する考え方を改める必要があるのではないだろうか。

わが国では、あちらでもこちらでも公害という話題で持ち切りである。人間が作り出した多くの化学物質がもたらした結果である。我々の環境については公害と騒がれているのに、自分達のからだの中の事についてはあまり騒がれていないようである。薬も、化学物質の一つです。私達が薬を服用することによって、直接にからだの中を蝕んでいるという危険性はないのでしょうか。

そもそも病気と戦うために作り出された薬というものは、本来は毒であり、必ず副作用を持っている。生体内部の環境には決してなじまない物である。もともと、からだには病気によって狂わされた状態をもとに戻そうとする精巧なしくみ＝「自然回復の力」がある。化学物質の一種にすぎない薬は、体内にはいると大部分が肝臓で色々な化学変化を受けて身体を回る。このとき、薬による化学作用が強すぎると、肝臓は確実に傷つけられるのである。薬というものは、からだになじまない異物としての化学物質である。だから多量に服用していると、肝臓は少しずつ破壊されていくというわけである。実際、肝硬変による死亡者は増加してきているのである。

果して身近にある薬には病気を治す効果があるのでしょうか。薬を飲んで病気が治ったからと言って、その全てが薬の効果によるものであるとは断定できないのです。というのが、病気が治ってゆくということには、先に述べた「自然回復の力」と、何かを飲むという事が人間に与える心理作用とが、強く影響を及ぼしているからです。

では、薬の効力はどのような手段で確かめられているのでしょうか。それは、動物実験によっている

のです。確かに動物実験で、それが人間に対するのと同じ効力が証明されているものもあるでしょう。しかし、動物と人類には種としての違いがあります。果して動物での結果がそのまま人類に当てはまるのでしょうか。また、健康な動物で行なった結果が病気の人類にそのまま適用されるのでしょうか。さらに言えば、人類には一人一人に個人差といわれるものがあります。そう考えてみると、結局のところ人間の薬は、病気の人間において試みることによってしか発見され得ないように思われるのです。

薬は生命に直接かかわる品物です。文明諸国では、薬はカゼ薬と消化剤のみが自由販売の対象となっていて、それ以外は原則として医者が使用するものであると決められているそうです。それは、一般の国民が勝手に薬を服用して病気を手遅れにしたり、薬の中毒でひどい目にあったりするのを防ぐという配慮からです。わが国では、薬は自由販売されており、広告や宣伝も自由に許されています。つまり、薬が生命にかかわるという尊厳性は、全く見失われており、一般商品なみに取り扱われているのです。加えて、国民の方も認識不足であって、多く薬をくれる医者やたくさん注射してくれる医者を良い医者だと錯覚したり、製薬会社の広告をそのまま信用して多量の薬を服用しがちです。自分達のからだか、そうすることによって蝕まれていることに少しも気付いていないのです。

アメリカでは、薬品広告には必ず副作用・禁忌・有効性などを定められている規準に従って明記することが義務づけられているそうで、その結果、薬品広告は医師が使用前に起こりうる作用について必要最少限の知識を得るのに役立っているという。わが国ではどうでしょうか。身近にある薬品広告やラベルを御覧下さい。副作用・禁忌・有効性などがきちんと明記してあるのでしょうか。薬は直接、生命を脅かす品物です。もう少し企業に考えてもらいたいところです。

薬の効果は、使用量に応じてますます強くなるというものではありません。ある範囲内ではこのような事も言えますが、逆にその範囲を越えてしまうと

副作用とか中毒作用を起こしてしまうのです。ビタミン剤を日常服用している人がいますが、普通に食事をしている人は余分にビタミンをとる必要はなく、多量に摂取しすぎると、かえって副作用を起こすことが、最近はっきりしてきているそうです。薬は、

本来は毒です、そして、生体の「自然回復の力」を、単に補助するだけのものです。みなさん、薬は必要最少量を必要最短期間だけ使用するよう心がけましょう。

最近の微古生物学

加藤道雄

私の研究対象は、新第三紀以降（2300万年前～現在）の微化石、特に有孔虫化石・石灰質ナノプランクトン化石・介形類化石である。化石というと、貝化石・骨の化石などを思い浮かべる人が多いと思われるので、微化石とはなにか、さらにこの分野ではどのような研究が進められているかを紹介して「私の研究」にかえたい。

一口に微化石といっても動植物界にまたがるバラエティに富んだものである。有孔虫・放散虫は原生動物であるが、珪藻・石灰質ナノプランクトンは藻類、介形類は節足動物である。大きさからいえば、数ミクロンの石灰質ナノプランクトンから、通常数mmを超えない有孔虫までである。化学組成からいえば、放散虫・珪藻は珪酸からなる殻を有し、石灰質ナノプランクトン・介形類は炭酸カルシウムの殻を持つ。有孔虫の殻は、炭酸カルシウムのもが多いが、類キチン質のものもあり、膠着質といって砂粒のような外来物質をセメントして殻を作るものもある。生活の場としては、有孔虫・珪藻は底生と浮遊性とがあるが、介形類は底生と遊泳性である。これらは淡水・汽水・海水と広い領域に棲息し、水の性質によって固有の種の棲み分けが見られる。その他のものは浮遊性であるが、淡水棲・海棲両方のものや、純海棲のものもあり様ではない。

古生物学の基礎的分野の1つに化石層位学がある。産出化石の組み合わせや分布により地層の区分・統合を行ない、また離れた地域の地層同士の同時性を追究する学問で、微化石によるものが化石層位学である。

微化石の研究が近年急速に進歩したのは、観察技術が開発され、光学顕微鏡から電子顕微鏡へとより微視的な世界が展開したためである。しかしそれに

もまして、少量の堆積物中に多数の個体が含まれ、統計的处理にたえることに原因がある。ある種の微化石では、海底堆積物1cc中に $10^9 \sim 10^{12}$ もの個体が含まれている。

微化石層位学、なかでも有孔虫による研究は古くから世界的に行なわれ、油田地域の地質構造の解明に貢献した。しかし昔は底棲有孔虫化石が対象であり、地層の生成環境解明に有用性を発揮した。1950年代に入り、浮遊性有孔虫が脚光を浴びた。プランクトンの分布は、海流や水塊の分布に対応しており、汎世界的である。1960年代半ばに中米熱帯地域の第三紀層で、非常に細かく地層を化石帯に区分することに成功した。この化石帯が、地質年代層位区分の標準地域であるヨーロッパ大陸でも認められ、大西洋をはさむ両大陸で第三紀層の相互関係が明らかにされると、この研究は世界中に飛火した。日本においても、沖縄・宮崎・高知・静岡・房総・常磐・能登・秋田の第三紀層で研究が進み、相互関係が明らかにされ、日本列島の地史解明に貢献した。これらの研究成果が総合され、有孔虫化石により地球上の海成第三紀層を結びつけようという勢いになった。同じ頃、アメリカで深海掘削計画（Deep Sea Drilling Project）が始まり、海底から150m以上の長い柱状試料が採集されるようになった。まず有孔虫化石が時代決定に使われ、続いて他の微化石の詳細な研究が行なわれた。海洋底堆積物中の微化石研究が始まると、造山・造陸運動の結果陸上に露出し、変形・風化を受けた岩石中の化石よりも保存が良く、微妙な形態的特徴もわかり、分類学的研究も進歩し、現在では逆にその結果を陸へ応用するようになった。

古生物学は時代決定だけを行なうのではなく、本

